考えて　やってみて　次の意欲へ

創造・挑戦・感動

篠山東中
学校だより
１月号 No.12

一日の計は晨にあり　一年の計は春にあり
一生の計は勤にあり　一家の計は身にあり

あけましておめでとうございます。いよいよ令和６（２０２５）年がスタートしました。
輝かしい新春を迎えられましたことをお慶び申しあげるとともに、子どもたちの健やかな成長と皆様のご多幸を心よりお祈りいたします。
さて、**「一年の計は元旦にあり」**という諺（ことわざ）はよく聞きますが、由来を調べると、中国は明の時代、『月令広義（げつりょうこうぎ）』という書物に行きつきます。（諸説あるようですが…）**晨**は**あした**と読み「朝」を表し、春は正月を意味します。さらに、勤は「働く」ことを、身は「健康」を意味します。ここには「４つの計」がでてきますが、どの「計」も人生には欠かせない大切なものです。
簡単に訳すと、**「何事も、まず最初に計画を立て、一所懸命に働くことで一生が決まり、健康に過ごすことで一家の行く末が定まる」**という意味になります。何事においても物事を始めるときは、目標を掲げ、計画を立ててから実行することが大切であることを表しています。

今年は巳（み）年。巳年は、脱皮を繰り返す蛇のイメージから「復活と再生」を意味し、生命が誕生する時期、新しいことが始まる年と言われています。また、巳を実（み）にかけて、実を結ぶ、達成の年とも言われています。しっかりと目標を定め、その目標が達成できるよう、皆様にとって、この一年が成長と変革を遂げる素晴らしい年になることを願っています。

３学期は一年の締めくくり、総まとめの学期です
～ 一段一段、確実にのぼって、次なるステージへ ～

いよいよ３学期が始まりました。３学期は一年間の締めくくり、総まとめの学期です。
登校日数だけをみると、３年生は卒業まであと４７日、１、２年生は修了まであと５１日です。
その間、それぞれの学年が大きな行事を控えています。ざっと挙げても、生徒会選挙、スキー学校、私立入試、公立推薦入試、学年末テスト、生徒総会、３送会（３年生を送る会）、公立一般入試、卒業式、修了式と…、本当に盛沢山です。
締めくくり、総まとめと言うと、少し重たくて大げさに聞こえるかもしれませんが、始業式でも話した通り、特別なことをする必要はありません。今、自分の目の前にあるやるべきことを、手を抜かず、粘り強く、最後までやり切ればいいのです。時間がかかっても構いません。誰かに手伝ってもらっても構いません。とにかく、確実にやり切るのです。そうすれば、４月には、新しいステージ、新しいスタートラインに、気持ちよく立てると思いますよ。

限られた時間をどう使うか。限られた時間で何をするか。自分に足りているもの、足りないものは何か。一度じっくりと自分を見つめ、自分と向き合ってみる（対話してみる）ことが大切です。そして、できれば、「これだけはやり切るぞ！」「毎日続けるぞ！」「今年こそは〇〇に挑戦するぞ！」という目標を決めて、その目標に向かって前進することです。きっと、皆さんの大きな力になるはずです。東中の先生たちは、そんな皆さんを全力で応援します。

私の 1.17 ～ 風化する記憶をたどって ～

３０年前の１月１７日。当時、垂水区高丸に下宿をしていた私は、一旦揺れがおさまるのを待って、一目散に学校に向かいました。今思えば、きっと近くでガス管が破裂していたのでしょう。外は砂ぼこりとガスの臭いでいっぱいでした。もし、近くで爆発でも起きていたら、今私はここにいないかもしれません。

当時、私が勤務していた神戸市立中学校は、兵庫区と北区との隣接区域にあり、市道夢野白川線（以前の西神戸有料道路）入口の近くの山裾に立っていました。学校に向かう途中、何度凸凹の段差を通ったかわかりません。地割れ、陥没部を避けながら、夢中で運転しました。鵯越の料金所を下り、丸山大橋にさしかかったところで、眼下の長田のまちから、黒煙が幾筋も高く舞い上がっているのが見えました。あの情景だけは、今でもはっきりと目に焼きついています。そして、あの煙の下で、何かとてつもなく大きなことが起きているという不安を抱きつつも、まだその時点では何が起きたのか、私には全く理解できていませんでした。下宿を出て、２時間近くかかったと思います。時間感覚も無くなっていました。ようやく学校にたどり着いた私は、目の前に広がる光景に愕然としました。あたり一面が砂ぼこりで覆われ、グランドは人と車でごった返していたのです。額から血を流し毛布にくるまって座り込んでいるお婆さん、エンジンをかけたまま車中で寝ている家族、助けを求めて泣いている子ども。

私はその時初めて、事の重大さを認識しました。と同時に、学校が避難所であることを自覚したのです。

職員室に入ると、すでに新任（当時２３歳）教師が１人出勤していました。当時私は２７歳。

しばらく、２人の時間が続きました。経験の浅い２人でしたが、体力には自信がありました。

とにかく必死でした。体育館の天井に穴が開き、壁の一部が崩れ落ちていたため、別棟（東館）の校舎１階部分の教室を開放し移動してもらいました。（後になって、何度も大きな余震が起きたことから、この判断は適切でした）もちろん、水道・ガス・電気等、一切のライフラインは遮断されていましたし、当日はとても寒さが厳しかったので、その日の作業としては、石油ストーブを運んだり、校舎内の段ボールをかき集めて教室や廊下に敷きつめたりして、人が暖をとれるスペースの確保に全力を注ぎました。それが終わると、プールの水をバケツに汲み取り、開放した教室やトイレ前に設置しました。これには、用を済ませた後便器を洗い流すための水と、手を洗うための水が（２つのバケツ）必要でした。

午後になって管理人(校務員)が１人、作業を終え薄暗くなった頃に先輩教師が１人出勤され、結局、地震当日に出勤した（できた）職員は、僅か４名。一方、余震の影響もあり、避難者は、その夜５００人を超えました。その日は「アッ」という間に時間が過ぎ、避難者の対応に追われて過ぎて行きました。そして翌日から、職員による不眠不休の避難所運営が始まりました。生徒たちの安否確認を始めたのは、運営が軌道に乗り出した２日後の１９日のことでした。

右の詩は、当時神戸市内の中学３年生が書いた詩です。私のクラスの生徒３６名は、幸いにも全員無事でしたが、学年の生徒の中には、大けがをした生徒、家屋の倒壊で母親を失った生徒、家が全焼した生徒もいて、自分が無事だったからといって喜べない状況がありました。

あれから３０年。神戸の街は見事復興を遂げ、外見上は美しく、新しい街並みが蘇りました。

でも、今なお多くの方が震災を引きずりながら生活しておられます。その現実から、私たちは決して目を逸らしてはいけません。

そういう私自身からも、当時の記憶が薄れてきています。神戸を離れ、地元丹波の地で暮らす毎日の中で、何か大切なものを忘れてしまいそうで、毎年、この１．１７を迎える度に、こうやって皆さんに当時を伝えています。

生きる

くずれた校舎
静まりかえる教室
燃えさかる家々

だれもが心を傷(いた)めた日

「がんばろう」この言葉のとびかう町で
生きた

普通に授業を受けることが
普通に友に会うことが
普通に水を使うことが

何よりも恋しかった

「がんばろう」この言葉がとびかう町で
あすも　生きる

～ある女子中学生の詩より～

※是非、ご家庭や地域でも、生徒たちに、皆様の“1.17”を語ってやってください。よろしくお願いします。